

「犬」を読むために

一 本文

中勘助「犬」の文献的成立過程をごく簡便に表示することから始めよう。従来は、単行本所収本文末の記述のみを見て、初出にあたり確かめることをしなかつたためか、大正12年作とする記述が多かつた。^{〔注〕}これでは余りに無造作だろうと思つたからである。

○大正10年11月 第一稿、洋野紙に執筆中。

○大正10年12月26日 第二稿、原稿紙に着手か。

○大正11年3月2日? 右へ鋭筆で手入れⅡ第三稿、了。

○大正11年3月8日 右を訂正浄書Ⅱ第四稿、脱稿。

○「この間」 『思想』編輯者が若干字句を削除。」

○大正11年4月1日付刊『思想』第七号に発表。初出である。

○大正12年7月4日 改訂本文、脱稿。

○大正13年5月10日付刊単行本『犬』に収録。

堀 部 功 夫

○この間 読む度に手入れ。

○昭和36年1月30日付刊『中勘助全集』第二巻に収録。

このうち、私の見る事ができたのは、

A 初出

B 単行本所収

C 全集所収

の各本文である。

Aは、本文掲載に先だつて『思想』編輯者による△「犬」の作者中勘助氏は「提婆達多」及び「銀の匙」の作者那珂氏と同一人である。近來他に「那珂」と称して物を書いてゐる人との混同を避くるため、氏は今後その実名を署することにした。「改行」氏がその寡作に拘はらず、現代日本の極めて少数な優れたる芸術家の一人であることは、右に挙げた三つの創作によつて充分示されてゐると思ふ。▽との罫み記事があり、また本文題下に△(未定稿)▽と付す。

Bは、Aの改訂本文である。その改訂部分は、推敲によるところもあるが、一番目立つのは對警視庁の配慮よりする伏字の多用である。

Cは、Bを勘案しつつAを再訂した本文か。Cの△あとがき▽は本作を読んでいくうえで参考となる。「犬」については

「提婆達多」のち頭の中で渾沌としたものが仏教辞典で偶然目に触れた鬼形きぎょうの挿画と、それから知ったビダラ法といふ呪法が触媒的に活いて一遍に纏った。「思想」に出したため岩波が警視庁へ呼ばれたけれど陳弁これ努めたお蔭で私も無事にすんだ。そのとき朱線をひかれた個処はこの本でも全部省いてある。警視庁はどうやら無事にすんだものの私の周囲や世間はさうはいかなかつた。作者の本意がわからない人びとの軽蔑や、嫌悪や、邪推や、憤慨や、大変だつた。しかしこの人騒がせな作品は自分ではよく出来たと思つてゐる。

と述べ、Cにも、外庄による省略部分がそのままであることをことわっている。そのため、以下の本考に引用する「犬」の本文としては、Aを採ることにした。なお「犬」本文に限らず、引用文の字体は厳密でない。

〔注〕「犬」大正12年作とするものは

○水沢夏彦「本考文未掲載文献1」p.188

「犬」を読むために

○齊藤昌三「本考文未掲載文献3」p.37

○『現代日本文学全集75』〔筑摩書房、昭31・6・25〕の渡辺外喜三郎編「中勘助年譜」p.412

○吉田精一編『中学生文学全集17』〔新紀元社、昭32・6・30〕の「中勘助」年譜 p.156

○吉田精一編『日本文学鑑賞辞典近代編』〔東京堂出版、昭35・6・30、管見本は後刷〕の熊坂敦子「銀の匙」項末p.209

○川副国基編集『人と作品現代文学講座5』〔明治書院、昭35・12・10〕の熊坂敦子「中勘助」p.111

○藤原久八「本考文未掲載文献5」p.267

○谷崎潤一郎「他6名」編集『日本の文学16』〔中央公論社、昭44・9・

5〕の浅井清「中勘助」年譜p.513
などである。このような風潮のなかで、正しく初出を報告した功は鈍立春佳にあり、成立時の中勘助書簡を紹介した芳は渡辺外喜三郎にある。

二 出典若干

(1)
有名なガーズニーのサルタン・マームードは印度の偶像教徒を迫害し、その財宝を掠略することをもつて畢生の事業として、紀元一〇〇〇年から一〇二六年のあひだにすくなくとも十六七回の印度侵入を企てた。いつも十月に首都を發して三ヶ月の不撓の進軍をつづけたのち内地の最富裕な地方に達する慣ひであつたが、〔略〕
〔p.1〕

「犬」の所拠資料などこれまで全く明らかにされていないけれど、

この書を出して、V. A. Smith: *Early History of India*. に拠る部分があるのではなからうか。Smith の同書は『提婆達多』の参考書の「いづ」中が目を通してつたのは、確実である。3d. ed. (Oxford university press, 1914) の管見本を引用し、「大」書き出しに生かちれていゝ思ふ部分に下線を引く。

At Kanaui, Vijayapala had been succeeded by his son Rāiyapala, who took his share in opposing the foreign invader. A few years later (A. D. 997) the crown of Sabuktigin descended, after a short interval of dispute, to his son, the famous Sultan Mahmūd, who made it the business of his life to harry the idolaters of India, and carry off their property to Ghazni. He is computed to have made no less than seventeen expeditions into India. It was his custom to leave his capital in October, and then three months' steady marching brought him into the richest provinces of the interior. (p. 382-383)

右の推測のごとくならば、中は「大」の時代背景的記述を歴史書の借用で済ませているわけで、そのてん『提婆達多』執筆時へ参考書は相当読んだけれど目的は小説で歴史ではないのだから結局自由な態度をとつた。『中勘助全集』第二巻あとがき) 姿勢に通いあ

う。「大」において、「時代」はそれほど重役をになつていない、ともいへよう。

〔マームード軍の青年隊長ヂェラルがインドの娘を凌辱した。娘はこの異国の青年を憎めず、かえつて慕うようになった。その娘をみて欲情にかられた老醜の苦行僧が、起尸鬼をヂェラル方に派遣する。〕彼は立ちあがつて入口のはうへ歩み寄つた。そして鎖しの紐をほどいて顔を出すや否や「あゝ」

とつてとびのいた。と、解き放たれた入口からぬうつと変なものがはひつてきた。それは確に人間の形はしてゐるが素裸で、全身紫色にうだ腫れて、むつとするいやな臭ひがする。そしてつらつた目から汗が流れだしてゐる。腐れかゝつた屍骸なら戦場で見飽きてゐるがこれは生きて歩いてゐる。〔略〕手には研ぎすました小刀を握つてゐる。ヂェラルは覚えす身をひいた。〔略〕そしてヂェラルが刀をぬかうとあせつてなりきに相手は突然痙攣的に右手をあげて小刀をぐきと彼の胸に突きさした。ヂェラルはどうと倒れた。そのうへへ折重つて化物の屍骸が。 (p. 26~27)

この屍骸を活動させる呪法Ⅱビダラ法の知識を、中は挿画入りの仏教辞典から得たという(前掲あとがき)。中が用いた仏教辞典とはいかなる刊本であつたか。

私は、それを織田得能著『仏教大辞典』（大倉書店、大6・1・5）ではないかと推測する。『仏教辞典』をいま近代刊・国書に限定して調査すれば管見分次の通りとなり、挿画の有るものについてビダラ関連項を引いてみたのである。

○大内青巒・島田蕃根・校閲・児島碩鳳纂輯『仏教字典』（白雲精舎、明28・8・20、管見本は後版）は挿画全く無し、で問題外。

○若原敬経編述『仏教いろは字典』四冊（其中堂書店、明30・1・5、刊年は第四卷による）。v. 四 p. 55△吉蔗▽項に△又吉蔗と言ひ、正には訖栗著と言ふ「所作」と訳す▽として『法華経』を引く。v. 四 p. 177△遮文荼▽項は『翻訳名義集』を引くのみ。v. 四 p. 280△毘陀羅▽項は△韋陀羅と同じ▽として『法華経』を引く。v. 三 p. 21△韋陀▽項中に韋陀羅△とも言へり▽と。いずれの項も不得要領で挿画を欠く。△起尸鬼▽△迷怛羅▽は項無し。

○藤井円順編輯『哲学館講義録 仏教科第一輯 梵語字典』（哲学館大学、明38・12・5）は挿画全く無し。

○望月信亨・荻原雲来・加藤玄智・鈴木暢幸編輯『仏教大辞典』第一卷（ア〜キンフ、武揚堂書店、明42・3・23）に△キシキ▽△キシヤ▽項無し。望月信亨著作となる同書第二卷（キンラ〜コイン、明44・9・24）第三卷（コイン〜サク、大5・12・8）には関連項未発見。

「犬」を読むために

○浩々洞編纂『仏教辞典』（無我山房、明42・9・10、管見本は後版）は挿画全く無し。

○藤井宣正著『仏教辞林』（明治書院、大1・11・30）には△きしき▽△きらしや▽△しやもんだ▽△びだら▽△めいたら▽△みだら▽項無し。

○仏教大学編纂『仏教大辞彙』第一卷（ア〜コ、富山房、大3・6・21）には△キシキ▽△キシヤ▽項無し。第二卷（サ〜セ、大5・12・23）p. 241△シヤモンダ▽項は△焰摩天の眷属たる七母の上首なり。胎蔵界曼荼羅の外金剛部院西方に列せり。赤黒色猪頭にして冠を戴き、右手に器皿を持し、左手を拳にして腰に当て、箆の上に坐す▽と説明するが、挿画を欠く。

○荻原雲来著『梵漢 仏教辞典』（丙午出版社、大4・3・14）は挿画全く無し。

○柳亮三郎『梵漢和四訳対校』（出版事項未詳）も挿画全く無し。右の経緯で、織田得能以外の『仏教辞典』を度外視する。さて織田の辞典についてみると、まずp. 81△シヤモンダ▽項に猪頭人身の△遮文荼の図▽を載せ△悪鬼の名。夜叉趣なり、即ち起尸鬼なり▽と説明、『演密鈔五』・『法華文句十』を引き△キシキ▽を見よ▽と指示。それでp. 239△キシキ▽をみると△毘陀羅法に用る鬼の名▽と説明、『菩薩戒疏与成註中』・『文句十下』を引き△「ビタラ」△キツ

シヤ」を見よ」とまた指示。こうしてp.149を開けると

ビダラ毘陀羅【異類】又、迷怛羅に作る。西土に呪法あり、死屍を起たしめ去て人を殺さしむ之を毘陀羅法と名く。〔十誦律

二〕に「有比丘。以二十九日。求全身死人。召鬼呪尸令起。水洗著衣著刀手中。若心念口説。我為某故作毘陀羅。即誦呪術。是名毘陀羅成。若所欲殺人。或入禪定。或入減

定。或入慈心三昧。若有大力呪師護念救解。若有大力天神守護。則不能害。是作呪比丘。先升一羊。若得芭蕉

樹。若不殺前人者。当殺是羊。若殺是樹。如是作者善。若不爾者還殺。是比丘。是名毘陀羅。〔優婆塞五戒相

下〕に「咒殺謂毘陀羅等。〔同与威疏註中〕に「毘陀羅者西土有咒法。咒死屍令起。謂使鬼去殺人。〔鼻奈耶〕に

「鞞路婆。鬼著尸也。使起殺人。〔慧琳意義三十五〕に「迷怛羅。唐言起屍鬼也。案に毘陀羅は起屍鬼の名なり、

法衆經陀羅尼品に韋陀羅と云ひ、灌頂經に弥栗頭韋陀羅と云ふ是なり。梵 Vetala

の項に至る。なお、同書p.242に「キチシヤ」p.174に「メイタ

ラ」p.183に「キダラ」の各項もあるが省略する。

中がビダラを知る契機をシヤモンダの図と推測した。この猪頭人身の図は、以下、人が犬になる伝奇への自然な導入となるものである。

ちなみにビダラについては、ソーマデーヴァ『屍鬼二十五話』(平

凡社、昭53・1・27、東洋文庫323)解説p.289~294が啓蒙的。いまは

ビダラの徘徊する時空が「神々(特にインドラ)や苦行者及びバラ

モンは、屢々、人間や天人を呪って、その姿を動物、植物などに変

容させる」(同書p.39訳註)世界であることを銘記すれば足りよう。

〔補〕その他に、「犬」は

○「仏教説話系統の作品」(伊藤整『現代日本小説大系17』(河出書房、昭26・11・15)の「解説」)

○「おそらく仏典から材を取ったらしいこの怪奇譚」(杉森久英・本考文末掲載文献?)

○「仏典から取材したもの」(斎藤昌三・本考文末掲載文献?)

ともいわれている。「仏典」について本文にふれた以外は未だ見当がつかない。

三 「つむじまがり」との関連から

二で「犬」の出典調査管見分を報告したが、中自身の旧作にも「出典」がないわけではない。

といて、恋愛・結婚・愛情に関する中の言葉はすでに渡辺外喜三郎が丁寧列挙しており、人間の醜態を扱った『提婆達多』とのつながりも従前に指摘がある。こゝでは今迄注意されなかった「つむじまがり」(「銀の匙」改訂本文の後半)との関連に絞ってみる。

「娘をわがものにした僧は、娘を独占するために、呪法を用いて自分と娘とを犬の姿に変えてしまふ。この境涯から娘は逃亡を試みる。」彼女は息をこらしてそつと身を起した。

そして忍び足に、僧犬の目ざとい動物の眠りをさますことなしに首尾よく住みかをぬけだした。外はまだ暗かった。彼女は今こそ天恵となつた鋭敏な犬の感官を極度に働かせて出来るだけ速くサカのはうへへかけだした。彼女はあせりにあせつたけれど路のわかれたところへくると間違なく方面をきめのために暫くは躊躇しなければならなかつた。彼女は気が気でなかつた。僧犬が目をさますまでにせめてあの川を越してしまはねばならぬ。追ひつかれぬうちに、早く早く。彼女はひた走りに走つた。幸に道も間違はず、夜のしら／＼とあける頃川岸へついた。彼女はそこですこし息をつかねばならなかつた。そして汀から頸をのばして水をのまうとした。その時彼女は後ろのはうにばた／＼といふ足音とはげしい息づかひをきいた。

「もうだめだ」

と彼女は思つた。

「くやしい。くやしい。私は逃げそくなつてしまつた」

(P. 51)

この脱出行は、私にすぐ「つむじまがり」の△はあや▽が語る経歴談の一節を思い出させる。

「犬」を読むために

(3)

「略」ばあやはその男「夫」が嫌で嫌でならずどうぞして逃げやうと思ひつゝも終に逃げおほせず幾年を過して「略」その後また性懲りもなく女を連れこんではあやの横腹を突いたのを当身をくはして殺さうとするのだと思つて家を逃げ出しその時分には大きな猪など沢山ゐた△△山を越江である寺に泊めてもらつたがもうそこ迄も手が廻つてるとは知らず和尚に巧く騙されてもと来た道を帰るところをどつこい待つたと爺さんにつかまへられちつとかゞんでしまつたら

「この馬鹿め帰れ／＼」

といつて引立てゝ戻つた。(『東京朝日』、大4・5・24)

〔補〕 恋人を追つて川岸へたどりつき、それからさきのかなわぬ場面に「生写朝顔日記」のかげが揺曳するが、未検討である。

「娘は依然ヂエラルを慕いつづけるので、僧犬は嫉妬に苦しむ。」「わしはこんな身体ぢや。さきはもう見えてゐる。わしはこのまゝでは死んでも死にきれぬ」

そんなこともいつた。實際彼の身体はひどく弱つてきた。

全身の悪瘡はます／＼烈しくなつた。彼は間がなすぎがなそれを爪と歯で掻きむしつてゐる。そのたんびにばら／＼と毛がぬけて赤肌から血膿が流れる。爛れ目のうへに眉毛も髭もなくなり、肉ばかりの尻尾がちよろりと垂れて、見るもいや

(4)

五一

らしい姿になつた。彼は痒さに責められて疲れきつた時のほかはおち／＼と眠ることもできない。気力も体力も衰へはてゝ今はたゞ猛烈な獣慾ばかりが命をつないでゐる。〔p. 65〕

この醜態も、「つむじまがり」で△私▽が飼つたことのある犬の病状を髮籠とさせる。

そのうち冬の初め頃どこかで腫物をうつゝて来たのが次第に体ぢゆうにひろがつて頭から尾の先まで瘡蓋だらけの見るも嫌らしい赤裸の犬になつてしまつたが自分の姿を見らぬあはれものは腹がへるとは眉毛のぬけた顔に媚をつくり毛のない尻尾をちよろちよろと振つてせびりに来る。腹がよければ日向をよつてほと／＼と寝てゐるが目の醒めてゐる間は絶江ず体ぢゆうを掻きむしるため腫物からは血膿が流れ後足の拇指の爪がぶら／＼にはなれてしまつた。彼が疲れきつて寝てゐるのは目の高いうちで朝夕はあはれにまるくるまつて目を閉ぢたまふゝるへてゐるし夜は固より夜どほし眠ることも出来ずく／＼と泣声を出してゐる。もはや犬の間でも鼻つつまみになつて相手にされぬらしくこないだまで仲よく遊んだ隣の犬までが傍へよらうとすると歯を剥きだして追ひのけてしまふ。〔東京朝日、大4・5・22〕

中が△僧犬▽を書くとき、右箇所が実際の情景かを思い浮かべて

いたと推定する。

たゞし、「つむじまがり」にうかゞわれ、後の「しづかな流」で△病みほうけて常よりもいつそう醜くなつたタゴ〔飼犬〕はかへつてそれだけ私の愛情を深くさせた▽と明記される、犬への愛が、△僧犬▽に対しては全くみられない。嫌忌のみが記される。これは△僧犬▽が専ら獣欲の化身・淫乱の妖物であることに起因する。

△中は自分で「自分には色魔的要素がある。自分には色魔に墮落する機縁は十分にあつた」といふやうな意味を語つたこともある▽よし(安倍能成・本考文末掲載文献8)。色魔が人事でないから、懸命に性欲を抑えようとし、嫌忌一点張となつたものである。後年の夢で蜘蛛男とでくわし△総毛立つやうな気味わるさをおぼえた▽あと△蜘蛛男は実は我我お互のなかに遍在してゐるのだと(略)知ると同時にだしぬけにとつつかれはしないかといふ不気味さはなくなつたが、そのかはりあのいやらしいものが自分をはじめあらゆる人間の肉、骨、脈管、毛髪の前までも根をはつて宿命的な組成分になつてゐるといふことに對してたまらない不愉快を感じた▽場合と近い。それに、偽善への反撥が輪をかける。△婆羅門の權威と清僧の誉▽〔p. 2〕をもつ△聖者▽が己の飼いたらせた獣欲で女人を蹂躪する―この破倫の加重を剔抉するため、いきおい描写も露悪的になつたのだと私は理解している。

四 「犬智入」との対照から

〔恋人のもとへ行こうと、娘は再度逃走。僧犬が追いつく。彼はさも憎さうにいつた。〕

「これ、血迷はずとようきけよ。あの男は死んだぞよ」

〔え〕

彼女はぶる／＼とした。

〔略〕

「え、ではほんとうに……」

「殺したかどうか。切りこまざいても飽き足らぬわ」

(5) 彼女はぐら／＼とした。凄しい女の怒に燃えた。彼女は矢庭にとびかゝつて相手の喉くびと思ふところへぐわつとくひついた。僧犬は不意を襲はれて仰向けに倒れた。彼女はのかゝつてしつかとおさへながら死物狂に頭をふつて喉笛をくひちぎらうとした。そして僧犬がげえ／＼とかすれた声を出してはねかへさう／＼ともがくのをどこまでも噛みふせてゐた。僧犬はとう／＼息がとまつた。ぐたりとしてころがった。彼女は血みどろの口をはなした。そして恋人の墓石に身をすりつけて悲鳴をあげた。
(p. 69～71)

このような＼彼＼の末路は古伝承「昔話「犬智入」にてらしても決められたなりゆきであった、といえる。

断っておくが、作品と古伝承と接触の明証は無く、性欲・嫉妬の

「犬」を読むために

問題・人が犬になる変身などが「犬智入」には無い。直接的影響関係は多分に否定的だけれど、たゞ「犬智入」との対照により自ずと「犬」の世界が際立つはずだと思うので、「犬智入」を採録した延宝6年9月刊『御伽物語』巻二第七「七人の子の中も女に心ゆるすましき事」より抄引する。「野間光辰校、古典文庫、昭27・12・15に拠る」。山伏に聖者・犬にデニラルをそれ／＼置換えて読んでほしい。

〔略〕親が犬に娘の小便の掃除をすれば娘の夫にすると約束した。成人後の娘の縁談を犬が妨害する。娘は犬の妻になつて山に入る。あるとき山ぶし有て此山をよぎる。ならべし軒もみえなくに。そのすがたやさしき女。もの待風情に見えたり。なを過がてに立より。いかにおことはたがとふてこの山には住給ふといふ。女われにも夫のさふらひてといふ。山ふしつく／＼聞て。花ならば手折雪ならばつくねんにと一ふたいふこと葉の露も我恋ぐきにをき余りかきみだしたるうき草の。心の水にさそひ行なさけの淵もあさからで。ふかきちぎりもむすびたく思ひければ。さて其かたらひたまふはいづこにていかなる人ぞと尋れば。いはでもとおもふがほに。はづかしながら犬にちぎりて待るといふ。さてはさうかとさらぬ体にてたち立。このをんないぬにそはすべきやうこそなけれど。ある所に待るしに。例の犬みえたり。さらばこれなるべしころさんとおもひ。啊に

かくれて待る。犬更にしらず。はかりすましてたゞ一かたなにうちころし。からは土に埋め。日をへてかしこに又とふらぶ。女れいならずなげく。空しらずして何をかなしひ給ふぞといふ。さればとよこれくとなり。たゞかりそめにたち出て。けふ七日になり侍り。行ふおもはれ候そやと。なみだとともにかたる。さてはさやうに候か。猶ゆく身よりのこりし御身のいかがなり給はんいとをしくこそといふ。さてしもくやむかいもなし。我いまだ定まりし妻もなし。きたり給はゞさそひゆかんといふ。をんなもたよりなき身なれば。そのころにまかせて。ながくそひ侍り。としの矢もかずたちゆけば。子を七人までまふけたり。山ぶしある夜かたらく。御みがそひし白犬は。かくかたらひたきまゝに我殺し侍ると語る。心のした紐うちとけしははかなくぞ侍る。をんなつらくこれをうらみ。つゐにやまぶしをころせりとなり。故にこそ女には心ゆるさぬとかたれり。

〔下略〕

福田晃「犬掣入の伝承」〔昭50・6「昔話——研究と資料」〕
4号〕の整理を利用して、「犬」との対照を表示する。

発	「犬掣入」	「犬」
(I)	犬との約束。	—

端	展開	結末
(II) 女と犬との結婚。 娘が若い異教徒に身を許す。	(III) 山伏が犬を殺す。 聖者が異教徒を殺す。 (IV) 山伏と女との結婚。 聖者は僧犬となって彼女を妻にする。	(V) 山伏の告白。 僧犬は殺人を彼女に告げる。 (VI) 女の仇討。 彼女は僧犬を殺す。 (VII) 教訓。

展開・結末部に対応・相似がある。

にもかかわらず、「犬」が「犬掣入」と反対に、前夫ではなくて後夫の方を犬にしている相違点は見逃がせない。被害者でなしに、加害者の方が犬、という顛倒に、前述した犬の妖物への転落が利いているからである。

しかも、その犬に墮ちているのが「聖者」である。こゝに「聖者」∨「僧犬」∨との結婚生活のまがくしさが浮上する。まこと「神意によつて結ばれたる夫婦」は邪教徒の凌辱よりも遙に醜悪、残酷、且つ狂暴であつた。∨〔p.47、初出のみ〕

彼女の運命を損つた「僧犬」はすでに死んだ。彼女の「この身の穢れを淨め、今一度もとの姿にして、どうぞあの人のそばへやってくる下さい」という祈が神にとどき、人間にかえつた彼女が「奈落の

底へ墮ちてい／＼く〔P.71〕とあるので、「犬」は終わる。「犬聲入」の場合、＼女には心ゆるさぬ＼ことという一片の教訓でけりがつい

た。しかし、「犬」では、性欲を持つ人間のつらさが示されたまゝ、
 埒明ちやうめいはないのである。

〔付〕 「犬」参考文献

番号	署名	題名	年・月・日	掲載誌(出版社)	巻号
1	水沢 夏彦	近世好色文学考	昭23・9・15	(南有書房)	
	p.188～195。梗概と＼愛欲描写＼引用。削除字句を起こしたらしい引例本文は何に拠ったものか、不明。				
2	杉森 久英	第九隨筆文学二、中勘助	昭27・10・25	現代文学総説(学燈社)	Ⅱ
	p.260～261Ⅱで、中の意図と「犬」の出来ばえを鋭く追尋する。管見本は昭28・9・15刊三版。				
3	斉藤 昌三	『犬』の性欲描写	昭28・2・15	生活文化	1
	p.35～37。＼一僧侶が犬の自由な性交を羨やんで仏力で犬になることが出来たが、余り自由過ぎても肉体が保てないと悟つて、再び人間に戻らうと苦悶する筋＼と誤読。＼性欲描写＼引用。これも何に拠ったものか、不明。				
4	渡辺外喜三郎	小説から童話へ ―中勘助研究の一部―	昭28・3・31	文科報告〔鹿児島大学文学部研究紀要〕	2
	p.298～303。中の言葉を丁寧にとどめて、彼の恋愛・結婚・愛情感を闡明にし、その苦悶を読む。基本的文献。				
5	藤原 久八	中勘助の文学と境涯	昭38・5・30	(金喜書店)	
	p.176～180＼＼犬＼考。僧と娘とに醜悪・純真の対照的な人間像を見る。p.210～215＼＼犬＼の主題はほとんど「犬」の梗概。				

「犬」を読むために

6	関口 宗念	「犬」菩提樹の蔭」に於ける愛 ——中勘助のインド三部作(下)——	昭38・12・20	聖 和	4
	p. 18 ~ 32。婆羅門・娘から本能的な運命に流された人間の醜と美を読みとり、『提婆達多』と表題二作とを三部作と称す。				
7	山室 静	中勘助の世界	昭40・6・1	法 政	157
	p. 41、43。人間の醜悪をつきつめた作と評。△義姉との関係▽云々は要再考。山室は『日本詩人全集』十八付録〔新潮社、昭43・6・20〕「中勘助、八木重吉、田中冬二」でも「犬」が八人間性の深淵をえぐり出した▽作と一言評。				
8	安倍 能成	中勘助の死	昭40・7・1	心	十八七
	p. 74に色魔的要素に対する中の闘争を伝え、p. 75で「犬」の描写にふれる。				
9	渡辺外喜三郎	中勘助(十八)その人と作品	昭50・9・30	鹿児島大学文科報告	11
	p. 3、11。「犬」が人間の醜悪無残を描いたことを示す。				
10	渡辺外喜三郎	『中勘助』(二十) ——小宮豊隆への手紙——	昭52・9・30	鹿児島大学文科報告	13
	p. 8 ~ 10。大10・11・6付絵ハガキ、大11・3・3?付封書に「犬」執筆記事あり。渡辺の統稿〔昭55・9・30同紀要16〕p. 161の昭27・1・18付封書には「犬」文庫本化についての記事あり。				
11	浜田 伸子	中勘助「インド三部作」覚え書	昭54・3・30	冬 扇	3
	p. 47 ~ 51。三部作展開中「犬」が男女の性欲と愛とのかかわりを扱ったと位置付ける。				

『鹿児島大学文科報告』11・13・16各号抜刷は渡辺外喜三郎氏の、た天理図書館の蔵書を利用していただいた。記して深甚の謝意を「冬扇」3号複写は中島尚氏の御好意によって参看するを得た。ま 表する。